

「HSK 季刊わたぼうし」 第38号

発行者:わたぼうし連絡会  
発行日:1995年(平成7年)3月27日 '95 夏号

第38号のテーマ 家族1

家族みな 平等首振る 扇風機

作：比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い。主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## テーマ・家族1

今回のテーマについては、こんなにも内容がある投稿があり、皆さんの原稿の打ち込みをしていて、人間集団の基本的な家族というものの大切さを考えさせられました。本当に久しぶりに「HSK季刊わたぼうし」になったと思います。ご協力ありがとうございました。

### 家族

### 地域住民・主婦

両親の庇護を離れ15歳の時に一人暮らしを始めた。中学生当時から独立意識が強く、もともと辺地な為に、そこから学校へ通うことも、勤めに出ることもできないので、なお一層その思いが強かったのだと思う。したがって、苦しいことも悲しいことも自分なりに消化してしまう術を自然と身に付けてしまったようだ。

就職してからも、転勤等で住まいが変わることがあっても、一人の気楽さから旅行に出かけたり、休みの日には金沢で映画を見たり、ショッピングや食べ歩きを楽しんで帰るのだが、列車の窓から遠く石動山のふもと辺りに家々の明かりが点々と見えてくると、灯りの一つ一つが家庭にあり、家族があるんだなあ、うらやましい気持ちになったものだ。特に夕暮れの街中を歩くのが嫌いだった。

電灯がともり始め、どこからか夕食の支度をする匂いがしてくる。こんな時は鍵を開けて家へ入ってもひんやりとした空気までが、一層孤独に拍車をかけた。そんな独り暮らしが10年余り続き、今は子どもたちや主人や母に囲まれて、結構賑やかに暮らしている。

家族皆が私を頼り、私を見詰め、私を支えてくれる。その安らぎに甘え、時折一人暮らしをしていた頃をなつかしむのは私のわがままかも知れない。

もうすぐ、子どもたちも巣立ち、それぞれの道を歩き始め、だれも頼りにしなくなったとき、初めて家族の有り難さ、大切さに気づくのかも知れない。今からでも遅くないだろう。家族一人一人の声に耳を傾け、安らぎのある家庭を保っていけるよう頑張ろう。

### 母との思い出

### 地域住民・主婦

先日、3歳の息子が描いた「おかあさんの顔」を保育園で見つけた。最初は息子の描いた絵とは知らずに眺めていた。そこには子供の大好きな優しくおおらかな母親を想像させる顔が描かれていた。イライラと子供を叱りつける私の面影はどこにもなかった。

それが我が家の息子の絵だとわかったときは驚いてしまった。もうこんな絵が(ちゃんと目や鼻や口があり、髪の毛も描かれていた)描けるようになったんだ?!と嬉しかった。

そういえば私も子供の頃、母の絵を何度となく描いたものだった。小学校の高学年になってもまだ描いていたような気がする。

母の日に初めて贈ったプレゼントも自分で描いた「おかあさんのかお」であった。母はその後どんな贈り物よりも嬉しい表情を見せた記憶がある。

母との思い出はたくさんあるが、外で食事をした思い出がないのだ。あの年代はみんなそうなのかも知れないが、母は質素な人であった。

だから、たまに二人で街へ出ても外で食事をするという事は全くなかった。たまに私がねだると、私だけがお店に入ってパフェを食べさせてもらい、母は外で待っていた。

厳しい姑と感情の起伏の激しい夫に使え、農家の仕事をこなしほんの半日ばかり休みをもらって街へ出る母にとっては、汽車に揺られるだけで満足であったのかも知れない。

しかし、私としてはそれで満足することはできないのだ。どうしても母と外で食事をした思い出が欲しいのだ。それで、先日、二人の息子と共に母を誘って金沢へと繰り出し眺めのいいレストランで食事をした。私はとても満足した。母はどうだったろうか……。

二児の母となった今、母との思い出を二人の息子と共に作っていきたいと思うこの頃である。

## 家族

## 肢体障害・障害者支援施設 利用者

僕は以前にも書きましたが、(昭和60年発行の「季刊わたぼうし」第5号参照)18歳まで京都の西陣にいました。静岡の大学校に入った年に、学校の派遣実践中の日曜日に、鹿児島県の沖永良部島で、無免許の連れのバイクの後ろで、交通事故に遭遇しました。(症状は、脳挫傷の四肢麻痺です。)

即刻に沖縄の病院に運ばれました。その後、意識不明のまま京都帰っていろいろと転々とした後で、母の故郷である石川県の青山彩光苑にやってきました。医者のお話では、僕は一生植物人間やったそうです。

両親には、本当に苦勞のかけどおしで、僕が命を取り留めたのは、みんな両親のおかげです。これもやっぱり家族のおかげだと思います。もしも、違った血が入っていたら、現在の僕はなかったでしょう。

現在はつたないながらも、キリスト様を信じています。PS現在も車いすです。

## 利用していますか？ NHKの福祉番組

今回は、NHK教育テレビ、ラジオ第2放送の福祉関係番組をご紹介します。皆様のご参考になれば幸いです。

### みんなの手話

教育テレビ(月)19:20～19:50

再 (火)13:00～13:30

手話のボランティアを目指す人、聴力障害の人でも手話をよく覚えたい方を対象に、基本的な手話の語彙や表現のしかた、手話の特徴の解説、日常生活場面でよく使われる会話例などを、テレビの特性を生かして提供し、また、聴力障害者の方々の生活や福祉に関する情報コーナーも加えて、手話への理解を深めていく番組です。※書店でテキスト発売中  
(定価350円)

### 子どもの療育相談

教育テレビ(火)19:20～19:50

再 (水)13:00～13:30

心身の発達に不安や気がかりのあるお子さんのいる家庭の人たちに、子どもの発達に関して、どんな相談や療育のしかたがあるか、家庭ではどう療育したらよいかなどの解説や情報を提供していきます。

### すこやかシルバー介護

教育テレビ(水)19:20～19:50

再 (木)13:00～13:30

高齢者の生きる力を育み、高齢者が残された人生を豊かに生きることを願って介護のノウハウを伝える番組です。

介護のディテールを徹底的に紹介しながら、介護する家庭の人たちが日々感じる問題点や疑問点に答え、また、自治体や病院など地域での先進的な取り組みや家族の体験なども紹介します。

### あすの福祉

教育テレビ(木)19:20～19:50

再 (月)13:00～13:30

心身障害児・者福祉・高齢者福祉、婦人福祉、児童・家庭福祉など、現代の福祉分野のいろいろな問題について人々の関心を高め、理解を深めながら、これからの福祉のあり方を考えていきます。

### 週間ボランティア

教育テレビ(金)19:20～19:50

再総合 (土)10:30～11:00

現在、何らかの形でボランティア活動をする人は国民の30人に1人、またこれから始めたいと思う人は国民の4割にもものぼるといわれています。ボランティアにはいま、人と人を結ぶ新しい絆、社会を動かす新しい力としても期待が高まっています。

この番組では、多様で創造的な取り組みをしているボランティアの生き生きとした姿を、多彩なゲストのおもしろトークをまじえて紹介し、会社や家庭などの絆を越えたところに広がる「ボランティア」の新しい魅力を探っていきます。

パソコン通信「NHKボランティアネット」も開局中です。

アクセス電話番号

東京：03-3375-1072

富山：0764-42-8582

名古屋：052-961-7204 ゲストID；NVN20000

興味のある方は、アクセスしてみてください。

### 聴力障害者の時間

教育テレビ(日)19:40～19:55

この番組は、全国の聴力障害者の共通の広場として、聴力障害者の日常生活に役立つ情報や話題を提供していきます。

伝達手段としては、手話・指文字・字幕・口話など内容に応じて組み合わせて用い、聴力障害者の方に理解しやすいようになっています。

内容は、国内だけでなく海外の聴力障害に関する情報、職業や教育関係の話題、すぐれた仕事や業績を上げている人物やグループの紹介などで構成します。

### 視覚障害者の皆さんへ

ラジオ第2(日)8:30~9:00

再 (日)19:30~20:00

中途や高齢で失明された方、弱視の方なども含めた視覚障害の人たちを対象に放送する番組です。

日々の生活に役立つ視覚障害者関係のニュースや解説、視覚障害の人たちの生活についての知識・情報、人物の紹介、各地の話題など、音声によるきめ細かい情報で放送します。

### NHKきょうのニュース

~聴力障害者の皆さんへ~

教育テレビ(月)~(金)13:30~13:35 (月)~(金)19:50~20:00 (土)・(日)19:55~20:00

その日の昼のニュースを手話や字幕をまじえて提供します。

その日の主なできごとを、手話や字幕を交えて放送し、聴力障害の人たちに提供します。

### NHK社会福祉セミナー

ラジオ第2(日)18:35~19:00

21世紀を数年後に控え、わが国の政治・経済・社会の状況が大きく変わりつつあります。経済的や豊かさや合理化・効率化のみを追い求めてきた国民の価値感も変わってきて"だれもが生活しやすく、生きがいの持てる社会を作ること"が共通の目標と考えられるようになってきました。そして「社会福祉」も他人ごとではなく、一人ひとりが自分の問題として考える時代になり、より成熟した社会づくりのため積極的な福祉活動が展開されるようになっていきます。

『社会福祉セミナー』は、こうした最近の情勢をふまえ、福祉に関心をもたれるみなさんに、専門的かつ系統的な知識や情報をラジオの特性を生かして提供していく番組です。

社会・介護福祉士の資格取得を希望される方々や、福祉関係の施設・機関での業務に従事される人々、さらに、ボランティア活動を現在なさっていたり、これからはじめようと思っているみなさんなど、多くの方々に利用していただけるよう願っています。

(’95年度「NHK社会セミナー」テキストより転載)

### みんなの広場

#### ふれあい福祉祭りに行って

#### 肢体障害 障害者支援施設・利用者

5月28日(日)に行われた「ふれあい福祉まつり」に参加しました。会場は長町福祉研修館でした。風船バレーやパソコン通信など、その他、いろいろあって楽しかったです。友だちも一杯いたし、学校時代の友だち、「ほほえみの会」で知り合った友だちと話したり、パソコンをさわらせてもらったりして、すごく楽しかったです。

パソコンを使って時刻表がわかるシステムとかがあり、僕も電車が好きなので良かったと思いました。また、いろんな人と出会い、会話もしたりしました。

でも、初めて会う人たちと会話するのは、恥ずかしくてね。でも、自分から声をかけたりして、また、こんな機会を使って友だちを増やしていきたいと思いました。また、来年も是非、参加したいと思います。楽しかったです。

## ミニ作業所準備懇話会開催 卒業してからも生活のリズムを大切にしたい 資料提供:県立七尾養護教諭

5月20日(日)午後8時~9時、県立七尾養護学校の和室に「ミニ作業所設立準備懇話会」がありました。七尾・鹿島地区の保護者の人たちが子どもの卒業後の進路についてはなしあいました。「七尾手をつなぐ親の会」の役員(副会長4名)をはじめ、保護者と子供たち、学校職員など総勢30数名の参加がありました。発起人から主旨の説明や七尾手をつなぐ親の会から経過説明の後、自己紹介をし、懇談に移りました。その中で、共通理解できた事柄を整理します。

七尾には「みのり園」がありますが、卒業後、子供たちが地域に生活していくためには、充分ではありません。子供の障害の軽重や作業ができるできないを問題にする前に、子どもたちが学校で培った生活リズムを、卒業後も自分の生活リズムにしていくために、定期的に通える場所や仲間と集う場所が欲しい。そんな側面をもった「ミニ作業所」を作りたいのです。そのための活動を工夫していきます。

今後、毎月第3土曜日(午後8時~9時)、県立七尾養護学校の和室に集まり、ミニ作業所設立のための話し合いや事業について相談する機会を、持っていくことを確認しました。保護者の皆さんが、たくさん参加していただければと思います。

## 共に生きる地域づくりの講演会に参加して

### 肢体障害・障害者支援施設・利用者

去る5月11日、七尾サン・ライフプラザにおいて「障害者・高齢者の社会参加とボランティア」をテーマで、主催は七尾市社会福祉協議会、共催は社会福祉法人青山彩光苑、講師は須戸哲先生、北野雅子先生をお迎えして、2時間にわたり熱のこもった講演をしていただきました。

テーマは、両先生とも「ボランティア」という幅広い言葉と、そして、特に須戸先生は自分は何回も外国に行き、良いところ、悪いところを見て、また自分で経験したことや、欧米と日本との障害者に対する見方や考え方の違いを話してくれました。毎年、日本から障害者たちが研修に行き、女性の方はアメリカ人と結婚して帰ってこないそうです。欧米は本当に障害者や高齢者の住みやすい社会だそうです。須戸先生は障害者も健常者も、もっと公共施設を見て住みやすいように改善して、老後に備えて社会に意見を述べて欲しい。そして、障害者も自立心を持って頑張りたい、と話しておられました。

また、北野先生は「三才の時に病気で耳が聞こえなくなりました。」とっておられまし

た。北野先生の現在の職業は、県聴覚言語障害者福祉協会の常務理事です。先生の講演は「私なりの社会福祉論」を説いて話してくれました。先生は、バスに乗ると耳の聞こえない人たちは次の停車するところの地名もわからなく困ったこともあり、また、デパートに買い物に行っても、店員は手話通訳の顔を見て、自分が物を買っているのに自分の顔を見ない等。

また、テレビもNHK放送の時、画面等にも字幕をたくさん入れて欲しい。このこともNHKに働きかけていると話しておりました。

そうして先生も、各公共施設の案内所およびホテル、デパート等にもプロフェッショナルの手話通訳者を作り、その手話通訳者たちが専門性を生かし、社会的に定着していけるよう働きかけたいとも述べられていました。

私は二人の先生の講演を聞いて本当に感動しました。須戸先生は自分にも必ずやってくる老後のために全力をつくして行きたいとのこと。北野先生は早く一般社会より障害者の偏見をなくしたいと願っている、私も先生たちの講演に二ヶ所ほど自分の思いと通じるところがあり、本当にうれしく思いました。私たちも甘さを捨て、自分でできることに頑張っていきたいと思います。

最後に、この講演会を企画された七尾市社会福祉協議会、青山彩光苑の関係者に心より感謝いたします。

## 須戸 哲氏講演 1995年：七尾市サンライフ・プラザ テーマ：障害者・高齢者の社会参加とボランティア

☆講師、須戸哲(すど さとし)氏のプロフィール

1950年に大阪で生まれ、龍谷大学法学部を卒業、その後、一般企業で5年間勤務。1978年に「大阪行動する障害者の会」に参加して、そこからボランティア活動を始めます。おおさかボランティア協会、京都ボランティア協会などで活動する。

1992年に石川県小松市に転居。現在は小松市でボランティア活動研究所をしている。本来の職業は、老人保健施設で勤務中。その他、様々なボランティア活動、阪神大震災にもボランティア活動を行っている。

きょうは障害者の方がたくさん来られています。僕もボランティア活動と言いながら、17～18年ぐらい障害者の方々と一緒にいろいろ活動をしてきました。

その中で、僕の友人たちはアメリカの自立センターへ行ったりして、帰ってきて日本で障害者運動を始めた人が沢山います。

僕自身もこの17年の中に3年ぐらい、車いすの障害者の人と生活していました。というよりも、ボランティア活動ばかりしてしまっていて、食べられなくなりましてたまたま一人暮らしをしている障害者の家に転がり込んで、「身の回りの世話をする代わりに飯を食わしてくれ」ということで、障害者の家に3年程居候してしまっています。

そのときに、いろいろなことを考えました。やっぱり、障害者の方が街へ出てゆくには、日本の社会では非常に厳しいものがある。その厳しさを誰がクリアしていくかというと、

これは障害者の人自身がやるしかないわけで、誰もしてくれない。施設の職員がその辺をしてくれるかという、してくれない。その辺のことを少し話したいと思います。

僕は17年ほど、ボランティアにかかわってきまして、僕の恩師、僕にボランティア活動を教えてくれた、一昨年に亡くなられた「柴田善守」という先生がおられました。

今、日本でのボランティア活動というのは、柴田善守先生のおっしゃっていることとはかなり違った形で進んでいっていると思います。

それはどういうことかという、ボランティア活動というのが、場面とか現場の話になってしまっている、困っている方がいるから、車いすの方がそこにいるから、車いすを押してあげることがボランティア活動だというとらえ方をしている方が多い。

柴田善守先生にいわすと、「ボランティア活動というのは、本来、共に歩くこと、友だちになることだ。いろいろな境遇の人たちと出会って、そこで友だちの関係が生まれて、お互いが助け合っていくことである」というふうにおっしゃっています。

僕もボランティア活動は、そういうことだろうと思っていてるんですけど、日本では国の政策というものもありまして、ボランティアを推進しようということで、行為としてボランティアをやっていくことが非常に増えていまして、本来、友だちになるというものすごく大切なこと。「人間と人間が出会う」という基本的な出会いの場であるはずのボランティア活動が、ちょっと違った形になりつつあるような気がします。

僕は石川県に引っ越しまして、今年の5月に車いすの人たちと「ハート・サイド・ネットワーク」という、活動は金沢が中心ですけども、団体を作りました。この七尾にも会員の方がいらっしゃいます。きょうもいらっしゃるじゃないかと、いらっしゃいますね。「ハート・サイド・ネットワーク」という、障害を持つ人とそうでない人が、対等の場に出会える場を作りたい、ということで、呼びかけまして。

呼びかけた方の人間としては、最初の二年間の副代表という形で引き受けました。僕は健常者ですから、健常者という人間が前にできることはあんまり好きじゃなくて、僕らは裏方でいいんじゃないかって、大分「副代表になることを、いや、いや」ということで、頑張ったんですけど。

しかし、一方で、あんまりにも石川県で出会った障害者の人たちが、情報をもたなすぎるとか、持っていないがすぎるとか、ということがありまして、障害者の人と何か一つ一緒にしようということに関して、どうしたらいいのか、具体的なことが分からないということが多かったので、僕の経験で役立つのならということで、副代表を引き受けました。

一応一年たちまして、一年間あまり何もできなかったんですけども、来月(6月)から障害者の方の会員の困っていることを、健常者の会員が援助するというシステムをスタートさせます。

例えば、外出したいということであれば、外出に使う手段がなければ、会員の方で外出を応援できる方が、一緒に行って外出するというのを始めたいということで、今、最終の準備段階に入っています。

これを利用するのは障害者、応援するのは健常者という発想がありますけれども、「ハート・サイド・ネットワーク」では、必ずしもそういう発想はしていません。

別に車いすの人が車いすの人を迎えに行ってもいいわけで、車いすでも車を運転できる方がいらっしゃいます。そういう方が重度の障害者を迎えに行くことも可能であればそれ



でいいわけですね。という考え方をしています。

そして、障害者の会員も、健常者の会員もすべてが「ハート・サイド・ネットワーク」という団体が機能するために、すべてがそれぞれの役割を持たなければなりません。

障害者が家で座って待っていたら、いろんなサービスが提供されて、行きたいところに行くという団体ではない。自分たちがそういうことをしたいということを、自分たちの手で実践していかなければいけない。だから機関紙の編集などは、ほとんど障害者の人の手でされています。

原稿集めとか、実際の取材も車いすで出かけて行って、お店の取材をしたりそういうことをしています。それが当たり前だと思うのですけれども、なかなか日本の障害者の人たちというのは、いつも障害者の人が受け身になって何かサービスを提供される。という形のものが多い。そういうことになると非常に困ることになる。

僕の友人で、ダスキンの障害者留学制度でアメリカへ行った人が3人いますけれども、3人ともアメリカへ行って何が一番困ったかという、チョイス(自分で選択する、自分で決めること)である。そういったことが、日本の養護学校や施設で経験がない。

例えば、どんなことかといいますと、靴のひもがほどけた、じゃ結んでください。アメリカでは「自立センター」などへ留学しますと、アテンダトというヘルパーさんより、もう少しアルバイト的なアテンダトという方がいらっしゃいます。その人たちが身の回りの介助をしてくれるわけですが、その身の回りの介助も「自立センター」のプログラムに当然組み込まれていまして、日本から来た障害者に自分で選択させよう。そういう経験がなさすぎるといわけです。訓練に入り、「靴のひもをどういうふうに結ぶのか自分で指示しなさい。」日本では、靴のひもがほどけても、ボランティアがしてくれるのですよ。

今の僕は青山彩光苑という施設を知りませんので、職員の方もいらっしゃるの、そういう日々の生活の中に、障害者の人が自分で選択する、決めるということがどれだけたくさん取り入れるかということが、ものすごく重要になるわけです。

障害者の人が自分で何かを決めるという作業に対して、周りの人たちが援助をできていない。というのが今の日本である。施設なんかでもよくあることです。

障害者の人が黙って座っていれば食事が出てくる、という形の一日の生活の中で、障害者の人が自分で決めることのない生活。障害者の人が決める部分が非常に少ない。

その人たちが、社会参加したときに、非常に社会とか、世の中と、障害者の人だからといって、特別視、特別扱いしてくれない、ごく普通に扱ったとしたら、非常に障害者の人たちは困ります。

こういうところがアメリカへ行った障害者、自立センターへ留学した障害者の人たちが帰ってきて、みんな同じことを言っています。

日本の養護学校の今の教育では、アメリカあたりで障害者として「一生懸命やりたい」といっても通用しない。

ボランティア活動をするということは、障害者の人にとっては、当たり前なことになっていかなければいけない、というような気がします。というのは、自分たちが住んでいる社会というのは、住みにくいわけですね。生活をしにくいわけですね。

それを変えていくのは誰かという自分たちなのです。障害をお持ちの方も、僕も生活しにくいと思っています。僕は今、45歳ですから、あと20年もすれば、高齢化の仲間入

りするわけです。年いったときに、今の日本の世の中では、生活しにくい、住みにくいと思っています。だから、僕は障害者の人たちと団体を作ったり、ボランティア活動をしたりということは、今の世の中が少しでもハンディを持ったり、弱い立場の人たちに住みやすい社会になって欲しい。強いては、それが僕の老後が住みやすい社会になるのではないかと。僕も当事者。この社会が住みやすくなれば、僕も老後が豊になる。

皆さんが、これから自分の人生を楽しみたい、というようなことをもう一回考えていかなければいけない。今の日本の高齢者の問題で何が問題かということ、お年寄りが楽しむということをあんまり知らない。趣味がない、何か楽しいことをしたい。私の老人保健施設でも100名ほどのお年寄りがいますけれども、「何かしょうよ、何かおもしろいことをしょうよ」といっても、「もうえい、もういい」。

クラブ活動をもっとしょうということで、アンケート調査をしたところ何がしたいかと聞いて、アンケートで一番は「寝取りたい」。こまったもんやなあー。

クラブ活動がすんだら、ベットに戻って寝るとか、もうご飯すんだら寝る。お昼ご飯がすんだら寝る。「寝たらあかん、寝たらあかん」というって「ボール遊びしょうよ、風船バレーしょうよ」というて、寝に帰った人を引きずり戻してくる。みんな用意して集まってもらって。また、何かしょうとして。「手を変え、品を変えして」最近はお菓子作りをしょうとか、「手を変え、品を変え」してやっているんですが、皆さんは、またベッドにもどって横になろうと。そういったことばかりで、あま利楽しむことがないですね。

これは、今、施設におられる障害者はどうかな？楽しむということが日々の生活の中にたくさんあるのか、ないのか？皆さん、施設の中にいたら、そんなに楽しいことがないだろうと思うのですけれども、どんどん街へ出ていけばよいのですけれども、なかなか物理的に街へ出れない。

僕もこちらへ来るといって、いろんなところで情報を手に入れてくるのですが、僕の知っている限りでは、青山彩光苑という施設は非常にいい施設と聞いています。

きょうは、皆さん、障害者の方も多し、高齢者の方も多いのですが、自分たちが住みやすい街を作りたいならば、自分たちで何かを始めることをしなければいけない。「いや、私は重度の障害者だからボランティア活動はできんわ」というのでは困ります。

僕は健常者ですが、健常者はいつも元気はつらつにこのようにしているかということ、僕だって仕事に疲れることもありますし、ぼくはちょっと結婚が遅かったので、2歳の子供がいます。朝から子供の保育園の弁当を作ったり。

僕の奥さんは、小学校の教師です。僕は老人保健施設で勤めていますから、二人ともお弁当はいらぬ。ところが子供はお弁当がある日がありますので、奥さんは朝からお弁当を作らなければいけない。今朝はいつもより30分早く起きたので、奥さんは非常に機嫌が悪い。いつもは子どもを起こしにいて、おむつを替えたり、着替えをさせたりして非常に疲れて機嫌が悪い。

そういう疲れたときに、話し相手になってくれる人がいればいい、それが障害者であってもいいわけだし、何も僕の友だちがすべて健常者で、健常者は健常者に相談しなければならないことは、ないわけではない。

僕は毎年350枚ほどの年賀状が来るのですが、200枚ほどが障害者の人です。友だちはどっちかということ、健常者の友だちより障害者の友だちの方が多いで、ものの考え方が

障害者の方と発想が同じなのです。

だから道を歩いているだけでも、僕は健常者ですので、道をたっただと歩いているが、「駅前この道が動きづらいとか、絶えず、車いすの人と一緒に動いている感覚でもの見てしまいますから。」そういうふうに見てしまいます。 ～次号に続く～

## シリーズ・キッチンさんの駅弁食べ歩き3

### 笹ずし

### キッチン

金沢のおみやげとして笹ずしがあるようだ。金沢駅で笹ずしが欲しくなったらどれを買えばよいか私の独断で述べてみたい。

まず一つめは、絵馬ホームや弁当売り場にある大友楼(おおともろう)の笹ずし、これは真空になっていて少し長持ちするかも知れない。しかし、二段になっていて、しかも、ごはんが多すぎるなどしておすすめできない。

二つめは百番街にある芝寿司の笹ずしで確か10個入力で売っていたと思う。量が多くて一人で食べられない。味はまあまあというところか。

そして三つめは加賀むすびの笹ずしである。場所は地下道から都ホテルの商店街の左側である。ここも10個入力で売っている。

鯛(たい)と鱒(ます)が5つつつ入っていたと思う。芝寿司より小さく値段も高いと思うが私は一番好きだ。うまいものは簡単に買えないもので列車の乗り継ぎなどでは遠すぎて買えないと思う。

## これからの原稿テーマについて

- ・家族 (父の思い出、母の思い出)
- ・私の介護体験 (家族、施設での介護、行事、イベント等での介護体験を募集します。)

## 連載企画募集中

あなたも「HSK季刊わたぼうし」にユニークな連載企画をしてみませんか。趣味、講座、エッセイ等。年4回の担当をお願いします。

## 編集後記

阪神大震災でまだまだ不自由な生活をなさっている方がたくさんいらっしゃいますが、マスコミがオウム報道ばかりしており、阪神大震災の問題が解決されたように思われることが本当に怖いと思います。

今年の前半で一年が終わったように思われるこの頃です。 (Z.O)

NO.39のテーマは家族Ⅱ